

臥龍が丘は緑なり

村松高校東京同窓会会報

平成12年(2000)新春号





謹賀新年

平成12年 元旦 (西暦2000年)

新潟県立村松高等学校
東京同窓会 役員一同



2000年に 斯く思う

東京同窓会長 佐伯 益一

東京同窓会々報第28号、新春号を会員各位にお届けするにあたり、先ずもって同窓及び関係者各位がめでたく元気で、ご越年されたこととお慶び申し上げます。

然し残念ながら、また多くの友人を失った。

併せて謹んでご冥福を祈りたい。

平成11年は私にとって、とにもかくにも忙しい年であった。多くの役職を抱えながらも皆様に支えられて病床にも伏せず、無事今日を迎える事ができたことを嬉しく思い、忙しいのもまた“生きがいの一つ”かなとも思っている。感謝、感謝である。

さて、平成12年は西暦2000年と云うことで世間は騒いでいる。コンピューターに関連する事業、企業の人達はことさらに騒ぐ。マスコミもまたこれを煽り立て、いる。輝かしき2000年を迎えてなどと色々な記事が出るであろう。時を経れば3000年にも4000年にもなる筈、なんで騒ぐ？、と天の邪鬼かも知れぬと私は思う。

それよりも今年は皇紀二千六百六十年、神武天皇ご即位以来で、キリスト生誕よりも六百六十年も早いということをご認識願いたいと思うのである。即ち、日本の誇る連綿と続く歴史をもう一度振り返って考えてみようと思うのである。

戦後は占領軍によって、最近反日的日本人、これに追従する人権派なる学者、政治家、有識者、マスコミによって日本の歴史は著しく否定、もしくは歪曲されている。日本悪者論はもう、たくさんである。

凶悪なる殺人犯罪に無罪を主張する弁護人、警察官が警察官を裁き、官僚、企業トップの金銭汚職があとを絶たない今日は総て戦後教育の欠陥であり、真に憂慮すべき問題である。一日も早く是正されるべきであろう。東京裁判、侵略、慰安婦等の問題を肯定するのも、また然り。国旗、国歌も同様である。たとえ小集団であっても適当な時期を選び、我が国の歴史を勉強すべきであると私は提案したい。世界の何れの国でも自国の歴史や国旗、国歌を重んじている事を思えば当然であろう。

さて、紙数が尽きた。

同窓会の事に関しては今まで何度となく述べてきたので各位には十分ご理解を頂いていると考えている。

同窓会の集まりは、ただ多くの人が集まって、ワイワイ、ガヤガヤ騒ぐだけのものではなく、飲食を共にしながら何かしら自分の利にするものを見だし、新しい友人を作り楽しい雰囲気の中で、社会に貢献しようとの勇気を醸し出す場でもある。

役員は、そういう気分になれる場を作り出す任務を帯びている。謂わば参会者の世話役である。これを理解して戴きたい。一生懸命がんばっているのである。

今年も東京同窓会第43回大会が、6月3日に日比谷の下真ん中で開かれる。是非ご出席の上、日頃の疲れを癒し、英気を養って戴きたいと願っている。

意の尽くせぬ処多々あり、よろしくご判断を乞う。

諸兄 諸姉、益々健在なれと祈りながら。

平成12年度 東京同窓会開催のお知らせ

村松高校東京同窓会第43回大会

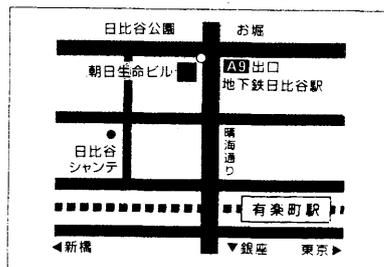
月 日 6月3日(土)

時 間 午後2時より

会 場 リトルパイレーツ
銀座店

日比谷朝日生命ビルB1

千代田区有楽町1-5-1
朝日生命ビル地下1階
(日比谷交差点東南角)



- 地下鉄日比谷線/千代田線/都営三田線・日比谷駅下車A9出口直結
- 地下鉄銀座線・銀座駅下車徒歩7分
- 地下鉄有楽町線/JR有楽町駅下車徒歩5分



第42回東京同窓会 に出席して

村松高校同窓会長
伊藤 淳一 (旧中33回)

かねてから、佐伯支部長さんから東京支部の同窓会にご招待を受けていたが仕事の都合で参加できなかった。この度は是非出席すると支部機関紙、臥龍が丘は緑なりに予告していた。万難を排しても約束を果たさなければと心に決めていた。ところが平成10年12月末、手術を受ける身となり、六月の上京は無理かと思われた。幸い思ったより回復が早く、長年その盛会ぶりをお聞きしていた東京の同窓会にとうとう参加させて頂くことができた。東京支部同窓会は、平成11年4月から新潟県立村松高等学校東京同窓会と改称されて組織を一新された。東京同窓会の更なる発展を願ってのことと思う。

第42回東京同窓会は、平成11年6月5日、浅草ROXニューオータニで午後二時から開かれた。出席者80名余り、村松からは私と田中校長代理の二名であった。

佐伯東京同窓会長のご挨拶があり、続いて私が同窓会活動の現状と二年後の九十周年記念事業と活性化資金へのご協力をお願いした。田中校長代理が学校の現状と部活動の状況を話された。同級の斉藤和男君が司会され、実にスムーズに会が運営された。アトラクションには、ビクター所属の杉幸子(高21回、小沢幸子)さんが浪花酒、ちくま恋歌を熱唱された。次々と喉自慢の諸君のご披露があり、くじ引きがあった。最後に校歌、旧中、女学校の校歌を斉唱、応援歌の幾つかをそれぞれの青春の思いをこめて歌った。たまたま同じテーブルにつかれた亀鳴謙、酒井忠の両先輩と楽しく懇談し、古き良き時代の村松中学を回顧した。先輩の外科医、吉田公男さんとも共通にお世話になった新潟高等学校時代の、おばさんのことに話がはずんだ。同級の伊藤勇五副会長、加藤三代太君から励ましの言葉をかけて頂いた。親戚の柁淵政海さんともお会いできた。同級の瀬倉誠介君にそっくりの瀬倉武志さんともお話ができた。いつも同窓会総会にお出でになる深見洋子さんともご挨拶できた。多くの皆様とお会いできて楽しい時を過ごさせていただいた。

このように東京同窓会がご盛会なのは、役員の皆様のご努力はもとよりであるが、佐伯会長のバイタリティーとお人柄によるものと深く感銘を覚えた。

東京同窓会の益々のご発展を祈念する。

(村松支部機関紙「飛龍」第12号掲載より)



教育と学習

村松高等学校長
内田 力

勉強しなさいと言われて勉強しても、なかなか身に付かない。いつも勉強が楽しかった人は少なく、ともすると嫌々勉強した思いの人が多いかも知れない。勉強が好きになるのは、きっかけに出会えた人と、出会えない人で大きく別れてしまう。

勉強には二通りある。一つは教える側と教えられる側のハッキリした、主に学校の「教育の中の勉強」であり、もう一つは、自分で自発的に行う「学習」である。学校でも生徒が「自分で学び、自ら好んでやれる学習型の勉強」に近づけるよう進める事が大切なことは言うまでもない。人はこの世に生れ、何の為に生きるのかを考えてみると、最も自分に相応しい仕事に就いて自分らしい生活をし、社会に貢献すること。すなわち「自己実現できること」とも言える。

人が人生の中で進歩・生まれ変わるには、学習することでのみ実現可能である。自分の殻を破って能力の限界を押し広げる可能性の拡大は、学習すること以外ではできない。一方、学校の成績が悪かった事で自分の頭が悪いと思いついでいる人がよくいる。学校の成績は頭がいいかどうかは全く関係がない。頭がいいことは自分で考えることであり、学校の成績が良いのは自分の頭で考えない事が得意な人だと言う人もいる。学校の成績が伸びない子のほうが負けではなく、完成度の高い人ほど成長には、それだけ時間がかかるのである。

「頭角を現す」とは、芽を出すのが遅いが最終的には伸びて来たという意でもあり、今一度味わってみたい言葉である。昔から勉強は一生で終りはないと言われる。若者も年寄りもまた、新しい夢と可能性に向けて勉強(学習)する心を忘れないでほしいものである。

(村松支部機関紙「飛龍」第12号掲載より)

ちよつといい話

磐越西戦にSLが復活、4月29日から走り始めて11月末をもって一先ず休止となる。9月末現在で利用者は、5万5千人であるとラジオで報道していたから、この度の利用者は約8万人となる勘定となる。煙青云々を言う人もあろうが、随分と地域の活性化には貢献したと思う。冬の阿賀野川の雪景色を見たいとの要望が多いので、予定を1カ月繰り上げて3月から運転再開をするとも言っていた。

懐かしくもあり、嬉しくもある磐越西線のSLである。私は10月31日に乗ってきた。

皆さんもぜひ一度、SLで「奥あが」を訪れてみては如何でしょう。(伯)

第42回東京同窓会大会にぎやかに開催

◎松高東京同窓会の第四十二回大会が六月五日午後二時より浅草のR.O.Xニューオータニで開催された。

出席者は会員八十名で母校からは伊藤淳一同窓会長（旧中三十三）と病氣入院中の内田校長の代理として、田中憲一教頭（出雲崎町出身）のお二人が出席された。

今回の大会は本年四月一日、今までの東京支部から東京同窓会へと名称が変わった初めての大会であり、それを記念して出席者全員にお土産を用意、併せて広島市在住の白石キヨさん（高三回）寄贈によるオタフクソース会社特製の「やきそば」を添え、また会旗も横断幕も新たに作り替えた。

第一部の総会では佐伯会長の趣旨説明の挨拶に続き、伊藤本部長、田中教頭から夫々母校や同窓会の現状や活動について報告を兼ねたお祝いの言葉があり、議事では過去一年間の経過、会計決算等の報告が異義なく承認され、第二部の懇親会へと移った。

懇親会は、最年長で八十二歳の横松宏平さん（旧中二十回）の乾杯音頭で始まり会員と県人婦人部の有志による佐渡おけさ、相川音頭等の踊りのご披露があり、会場は一段と華やかさを増してきた。特別出演の演歌歌手、杉幸子さん（高二十一回）の大熱唱が更に彩りを添え、歌いながら各テーブルを回り、お酌や握手の大サーブに会場は大喜び。あとはカラオケで「プロの後は唄いにくいなァ」と言いながらも満更でも無さそうで甲乙なしの名調子。先輩の要請に応え、杉幸子さんの再登場など。恒例の会員持ち寄りの「景品抽選会」もめでたく終了。旧中、旧女、現校歌、応援歌の大合唱と続く。定刻五時閉会挨拶が終るやいなや「皆様、本日はどうもありがとうございます。またお逢い出来る日を楽しみにしています」の大横断幕がサツト広がり一同二度びっくり。これは佐渡の県人会「関東畑野会」からお借りしたもので、会にも将来は必要かも知れぬ。名残惜しいのか二次会は近くの「どせうの飯田屋」へ。また各学年毎の集団もそれぞれの会場へと散っていった。



写真右
杉幸子さん（高二十一回卒）



第42回・東京同窓会出席者名簿

平成11年6月5日(土) 浅草ROXニューオータニ

新潟県立村松高等学校東京同窓会

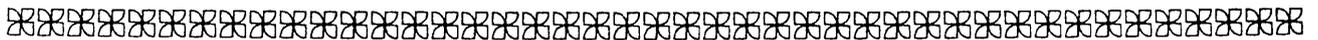
来賓 (4名)	旧中学校 (17名)	高校男子 (42名)	高校男子	高校女子 (15名)
村松高校 同窓会長 伊藤 淳一様	20回卒 横松 宏平	02回卒 青木 猛 杵淵 政海 篠川 恒夫	08回卒 関 和世 塚 豪 塚田 勝 山崎 輝雄	03回卒 佐藤 八重
村松高校 校長代理 教頭 田中 憲一様	22 亀嶋 謙	03 瀬倉 武志 土田 猛 渡辺 八郎	09 阿部 敏 石黒 四郎 熊倉 富次 増田 訓英	05 向山 律子
東京鹿瀬会幹事長 波田野亮一様	24 酒井 忠男 芳原 英男	04 大島 惣四郎 下野 文幹 鈴木 健次 鈴木 多喜男 弦 卷 等	10 大橋 貞夫 新保 優二 関谷 雄二 鶴 卷 浩	07 深見 洋子
民謡同好会 4名様	26 武藤 三郎	05 雲村 俊徳	11 田代 信雄	08 片柳 ムツ 木村 孝子 久我 マキ 山西 愈佐子
	27 伊藤 秀男 佐伯 益一 西山 莊平 吉田 公男	06 五十嵐 健 岩倉 富栄 佐久間 英輔 沢出 超允	12 安部 實守 荒川 守久 笠原 久三 佐々木 秀三	10 飯利 幸 小島 典子 真水 道子
	30 相田 幸四郎 五十嵐 一郎 岩見 益教 佐藤 庸蔵 佐藤 豊夫	07 遠藤 昭 八木 又一郎 梁取 錦二	13 武藤 正昭	12 近藤 燦子 徳永 道子 中島 和子
旧女学校 (6名)	33 伊藤 勇五 加藤 三代太 斉藤 和男	08 石本 芳雄 鈴木 輝雄	14 山田 俊治	20 安達 繁子
25回卒 一氏 愛子 岡本 和子 小林 早月 佐藤 治子 佐藤 玲子 鈴木 節子			18 佐々木 秀和 斉藤 正義	21 小沢 幸子

村松高校東京同窓会第42回大会 収支決算書

平成11年6月5日(土) 浅草ROXニューオータニ

収入の部		支出の部	
1. 懇親会費	760,000	1. 準備会費(4回)	36,877
男@10,000×60=600,000		2. 案内状、通信費	25,980
女@8,000×20=160,000		3. 返信ハガキ代	17,500
2. 来賓祝儀	40,000	4. 印刷費	4,645
同窓会	20,000	5. 懇親会費	602,000
学校	10,000	6. 謝礼	66,160
一般	10,000	杉 幸子	50,000
3. 二次会費	72,000	民謡同好会	8,000
@3,000×24	72,000	写真	4,080
4. 雑収入 (記念品5ヶ売却代)	9,000	横断幕	4,080
		7. 出席者記念品(120ヶ)	177,030
		8. 二次会費	160,925
		飯田屋	146,475
		その他	14,450
		9. 交通費	11,040
		10. 写真代(送料共)	27,264
		11. 雑費	7,178
		軽食代	6,247
		消耗品	931
合 計	881,000円	合 計	1,136,599円
収入-支出= △ 255,599円 (一般会計より補填)			

当日多くの会員の方々から、年会費及び寄付金を頂いておりますが、一般会計分として取扱い、お名前・金額等は11年度決算書にて報告いたしますのでご了承ください。



同窓会本部総会に出席して

会長 佐伯 益一

平成11年度の母校同窓会総会が8月15日(日)午後3時より城町の「明月」にて開催され、東京からは私と八木事務局長、深見常任幹事の3人が出席した。会長も茂野さんから伊藤さんに代わったこともあり何か目新しい方針が示されるかとの期待もあり、また多くの同窓、友人に会えるとの楽しみもあって出席したのであるが意外にも、出席者は極めて少なかった。数については地元の名誉のため敢えて記さぬが大体、東京の幹事会ぐらいと考えてよかろう。

総会では10年度及び11年度の決算、予算の報告、審議が行われたが説明者は只、棒読み、内容もよく分かぬままに異議なく承認。母校創立90周年記念事業推進については委員になる人の名が読み上げられたが、これは今後の課題。まともに聞いていなかったのだから分らなかった。東京からの出席であるのでなにか挨拶でも要請されるのかと思っていたが、それも無し。ただ懇親会の時、乾杯の音頭を乞われたが「時間をどれぐらい頂けますか」と訊いたら「ほんの少しだけ」との返事、又一声吠えてしまった。大学進学者の表彰、写真部の表彰などが行われたが、これは前にも書いたことがあるが、本来は学校がやるべき事柄と思う。

懇親会になったが、箸を持ついと間もない程お酌々々の連続、ありがたいことではあるが、これには参った。三々五々の宴席であったがマイクはあってもカラオケは無し、応援歌の合唱だけでは何だか盛り上がり欠けるような気がした。二次会は「木むら」に招待されたが、これもやはり寂しいものであった。座を取りしきる人もなく、個々の話し合いに終始していた。

散会するにあたり謝辞を述べようと思ったが伊藤会長から「もう終わりだから」と言われてしまった。

そこで反省の意も込めて今後の課題として考えてみた。まず第一に開催日と時間の問題がある。この度は旧盆の中日であった。日曜日とはいえ中々忙しい日である。まして午後3時からの開会は遠方、新潟や津川の方から参加する人達は帰りの時間を気にするであろう。第二には多くの同窓の参加を望むには周知の方法であろう。どのようにして知らせていたか分からぬが、知らなかったと言う人が案外に多かったことである。

東京では会員個々に返信ハガキを同封した通知を出す出席者は三分の一ぐらいであっても欠席者の消息位は分かる。大半は、理由を付して誠に申し訳ないが欠席させてもらう。次は必ず出るとの返事が来る。真似をせよとは言わぬが多数の参加を望むならば何かしら良い方法を考え出すべきではなかろうか。東京では半年も前から

周到な準備を始めているから斯様な大口もたたけるのである。総会は堅苦しいのは仕方ないとしても懇親会は、楽しくなるような趣向企画を考え出すべきであろう。然らばおのずからと人は集まる。

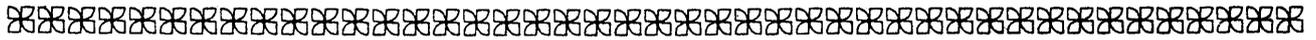
第42回東京大会に初めて出席された伊藤会長は久しぶりに懐かしい級友、知人に会えてとても嬉しかったと村松支部会報「飛龍」に書いておられる。左様、正にその通りなのである。

次に不審に思うのは毎年、総会の案内状をいただくが発信人が同窓会長と村松支部長との連名なのである。両者は同窓会として一身体であるかも知れぬが、夫々に予算を持った個別の団体である。悪く言えば便乗、良く言えば経費節約、人を集めるための算段と考えられぬこともないが、これは筋が違っていると思うが如何なるものであろうか。

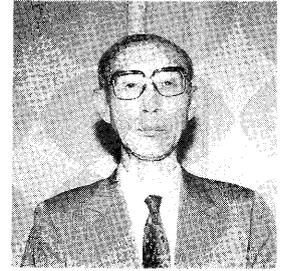
以上 思う事を卒直に書かせてもらったが、筆が滑りすぎたきらいもある。何卒 ご海容の程お願いしたい。同窓会におけるボランティア活動というものは肉体労働に比べ、はるかに難しいものである。(文責 佐伯)



懇親会(村松町城町・明月にて)



平成十一年度・東京同窓会に臨んで



亀嶋 謙 (旧中 22 回卒)

◎6月5日 浅草R.O.X.における東京同窓会第42回大会に出席させていただいた。当日は快晴に恵まれていた。会場は前から利用されており、私もよく知っているつもりで早めに出かけたが油断して行き過ぎてしまい、迷い込み、定刻寸前によく着くことができた。

受付で佐伯会長が私の来るのを待っておられたようで恐縮した。すぐ案内されて会場に入ったが、なんと主賓席のメインテーブルに座らされたのには戸惑った。

何時も旧制中学の、まあ上の方だということと同じ位の年代の人達と共にメインテーブルの隣の席ぐらいに着くのが常であった。席を見渡すと私より先輩は第20回卒の横松宏平さんお一人だけで、結局当日の出席者の内80代は横松さんと私の二人だけであった。80代の先輩というと茂野前同窓会長を初め3~4人は必ず居られたし、私達は文句なしに遠くから敬意を表していたものであった。まだご生存の方も多く居られるのだが大会に出ることに体調不順や気分が乗らないというのも理由の一つであろう。私なぞ、まだやっと80歳なのに到々このような席に座る身になったのかと、ため息みたいなものが出てきた。同窓会というところは何処も年齢順卒業年次順が基本である。いわゆる縦社会である。

人間は自分で齢をとるものではなく、側(狀)が齢をとらせてくれるものだと思う。そしてまた齢をとるのを嫌がる気持ちと共に、齢をとっていることで先輩扱いされるのを誇りに思う気持ちもあるのかなとも思う。

会場には70代の方は佐伯会長をはじめ相当居られるのだが、僅かの年齢の隔たりでも80代になると格違ひみたいな存在になる。男子の平均年齢は77歳位だろうから、80歳近くから80の坂を越え切るまでは割りと険しい急坂で亡くなる人が多いのである。だが人間はその80歳前後から貴重な人生観を感じ取る大事な年頃である。その年齢になると人生の裏表に通じてきて、若い時には想像も出来ぬような心境に至るのである。

私なぞは、これから益々精進してその境地を深めて行きたいと思っているが、ともかくこの年齢まで生きて来たことは幸運であり幸せであると思わなければならない。要するに、名利が絶対のものでなくなる心境になり、完全な自由人になるということであろう。そしてそれも、その人の人生が終りに近づくということになるのかも知れない。

(話を交える)

この大会の少し前に、私の家へ古くからの同郷の友人で和泉三次さんという人が訪ねて来てくれた。齢は私とほぼ同じくらいだ。彼は旧松中出身ではないが、中々の努力家で若くして上京、学校を卒えると警視庁に入った。累進して警視になり、過年度、叙勲の栄にも浴した。彼は園芸を愛し囲碁もやるが、特に書道を好くし漢詩もやっている。私の家を訪ねて来る時はいつも自らの書を掛軸にして持参してくれる。この度は次の書であった。

春光濃似酒
花故酔人
夜色澄如水
月来洗俗

春光こまやかにして酒に似たり
花ことさらに人を酔わしむ
夜色澄んで水のごとく
月来たりて俗を洗う

平成十一年(己卯)春 和泉泉堂

私は漢詩が分からないので、詩の良否は知らぬ。ただ彼の書が好きで何時も掛けて眺めては楽しみ満足している。六十年来付き合い合っている心の友は、性格・趣味が違っていても、心は一心同体で彼のことは私のことと同じである。彼はまた「臥龍が丘は緑なり」を何時もよく読んでいてくれる。その気持ちを私は好きである。

この詩の心境で、また来年の東京同窓会に出席したいと思っている。(平成11年6月下旬 記)



お便りの中から

順不同・敬称略

千代 國一 (旧中18)

◎東京同窓会の会報を余分に御恵贈頂き、誠にありがとうございました。八幡町と大和町に早速送りました処、大層喜ばれ、八幡城、また、和歌文学館に資料として保存する由であります。「国民文学」(私の発行している歌誌)は名古屋に最も大きな支部があり、130名位いますが文章のコピーを全員に配ります。

彼等のうち30名位の人は平成元年に私の歌碑が城跡公園に建った折、村松に来て慈光寺も訪れ、歌を作っています。残りの会報は岐阜県歌人クラブに送ります。

岐阜県の歌人に知れ渡ります。

本当にありがとうございました。

(会報27号に掲載された「歌会始」記事に寄せて)

亀嶋 謙 (旧中22)

◎東京同窓会第42回大会に出席させて戴きありがとうございました。毎年、盛大で充実した大会であることが嬉しく誇りに思っています。役員・幹事の方々が何時もよく奉仕して下さいること感謝に堪えず。この東京同窓会の良き伝統でしょう。これも佐伯会長の人柄です。

村松高校同窓会の力強いリーダーになって下さることを念願しています。会報もありがとう。編集の方々の労苦を謝したい。私の拙文をも載せていただき、改めてお礼申し上げます。今後とも益々の発展と、役員幹事諸兄のご健勝を祈ります。

五泉市 近藤 力雄 (旧中22)

◎会報をご恵贈下され有り難うございました。東京の皆さんのご活躍に敬意を表します。亀嶋君の「思い出」を読み、60余年前の事が懐かしく思い出されました。また千代國一さんは、私が1年生の時5年生で、当時はスマートな方でした。優秀な方が多く僅か1カ年でしたが可愛がられ、思い出多い最上級生達でした。私は油絵を描いていましたので、田中道久さん(東京芸大へ)笠原敏雄さん(東京芸大卒後、慶大歯科へ)は同期の笠原幸雄君(一高から東大へ)の長兄で憧れの人でした。ほかに何人か居られます。

旧中学校当時は素質のある方が多かったように思われます。私は村松愛宕中学校に7年間(昭和36~43)勤務いたしました。当時の松高学区の中学校では、成績上位の生徒は松高へ、他は五泉高校へ進学させていましたが、ストレートで国立大学へ入る者はなく、一浪しなければ入学出来ない状態でした。一浪した者には東大、東京外語大等に合格しています。何故かご推察して頂けると思っています。現在は上位の生徒は新津、中位は五泉、下位は村松となっているようです。素質のある生徒を入学させる為、実績を上げるのに校長も大変と思います。

新潟市 五十嵐 喜作 (旧中27)

◎同窓会報拝受 いつもいつもご高配かたじけなし。

〔活性化〕を読んで旧制と新制、生徒気質や教員の対応いろいろなものを一緒にしての同窓会運営ご苦労さま。

支部でなくなったということは“本部”への三下り半の意もあるのか? (お便り…)に臼井、白倉、そして中野夫人の文があったのは懐かしかった。

(?=否、そんなことはない。佐伯)

亀田町 大江 雅敏 (旧中27)

◎「臥龍が丘は緑なり」27号、更に同封の「松城」16号拝受、感謝の念に堪えず。東京の皆様が表札を改称され内容の充実、発展を目指し頑張っておられる由、全く敬服に堪えません。今後のご活躍をお祈りします。貴兄のご好意で「松城」を見ることができた。小生にしては、随分暫くぶりの拝読です。五支部から思い思い筆が加え

られているが、他支部からも、どしどし古今東西、相互に情報を提供し合っては如何かと祈っている。私共枝先末端に在る連中も、ただ母校を懐かしむだけでなく何らかのお手伝いも出来るのではないかと思う次第。

健康を祈る。小生腰を除き達者。

松高同窓会長 伊藤 淳一 (旧中33)

◎先般、東京同窓会に出席させていただき、御盛会ぶりに驚きました。その折は色々御配慮頂き、また大会時の写真たくさんお送り頂きありがとうございました。

新潟市 新田見 周三 (旧中22)

◎東京同窓会の会報ありがとうございました。

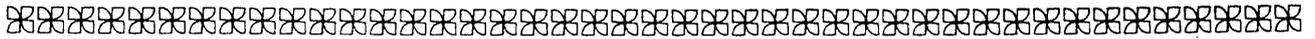
同窓の会員が組織的に、定期的に集会を持たれている事は実に素晴らしいことです。いろいろご尽力されている事と思います。新潟市でも三十数年前、当時市内の中学校校長だった佐野 宏さんの案内で、主として教職関係者でしたが一回だけありました。私たちの喜寿の会合の際は何かとアドバイスを頂きましたが「あれもあったなァー、こうすべきだったなァー」と数々の反省が思い出されます。あの佐潟も市の観察施設が充実して、年間十万人以上の人で賑わっております。

私もやがて満八十才を迎えますが、一応人生の一区切りの節目ですので「何かの機会があってもよいのでは」などと思っております。緑内障で視力が減退し全て拡大鏡に頼っております。言いたくないけど…歳ですね。

福原 平八郎 (旧中26)

◎会報に載った、亀嶋先輩の旧制村松中学の思い出のご寄稿文、非常に感銘深く読ませていただきました。

面白く楽しく。……………いずれまた後便にて……………



お便りの中から

順不同・敬称略

村松高校教頭 田中 憲一

◎東京同窓会の写真を多数お送りいただき有り難うございました。特に会員の集合写真は貴重なものとなります。

校長が出席すべきところ、不肖者の小生が代理ということで、皆さんきつとがっかりなさったことと恐縮しておりますが、どうかお許し下さい。それにしても楽しく貴重な経験をさせていただきました。また二次会では思う処を率直にお話し頂き、小生も率直に話すことが出来ました。お腹立の方もおられると存じますが、お互いに村松に縁のある身ということで、ますます親交も深まることと一人合点しております。それにしても東京同窓会の闊達なご様子が羨ましくも思われました。今も元気で活躍されている大先輩の方々の迫力は小生にとって良薬となります。会長様には、大東京同窓会を背負われての御活躍、心より感謝申しあげます。

内田校長は7月26日に復帰致しました。予定よりも一週間早めです。すっかり回復し元気であります。職員も校長の有り難さを再認識したところです。一丸となって松高を盛り上げたいと思います。 (後略)

酒井 忠 (旧中24)

◎誠に貴重な資料と「零戦に乗って」を長期間お借りして有り難く厚く御礼申しあげます。臥龍が丘は緑なりに投稿された皆様の活字に、ふるさと匂いと温もりを感じ、六十数年前の思い出に浸る事が出来ました。また、斉藤氏の著書は数年前に村松在住の、藤田精作氏よりお借りして読んだ事がありましたが、このたび再度拝見出来まして感激の一字でございます。

小生も海軍航空隊で大型機の搭乗員をしておりまして、彼が九死に一生を数々受けた経験や同窓の空の勇士の詳しい状況は極めて貴重なものです。ご本人によれば一冊は学校に寄贈されたとの事、多くの後輩が一人でも多く読んでくれる事を祈ります。



雲村 俊徳 (高5)

◎松高同窓会では並々ならぬお世話になりまして心から感謝いたしております。またこの度は、いろいろのご配慮本当に嬉しく思います。向山律子さんの恩師と知って心からの距離感もせばまってまいりました。

さて、本の件ですが出版社は10冊以上から、一冊を1,440円にし郵送料なしにするという約束をしてくれております。ところが注文が3冊だったので、紀伊國屋にて求めてまいりました。お釣りで「本当にビールでも飲もうかな」なんて考えたのですが「先輩のご好意をキズつけるような気がして止めました。これからは新潟を書き続けてまいります。同窓会にも参加します。

よろしくお引立てのほどお願い申しあげます。

五泉市 豊田 君枝 (併設中1)

◎あの暑かった日の集まりのスナップ写真を三郎叔父より戴きました。有り難うございました。

本部会というのに、あまりの出席者の少なさに大変恥ずかしく思いました。皆様、盆の十五日の出席は無理だと二、三、声をかけた時の返事でしたが、それより当日同窓会だということを誰も知りませんでした。

役員の方達は一生懸命なのでしょうけれども、会員にはまったく意識がないのではと思いました。

蒲原鉄道の電車も、とうとう九月末で終りを告げます。さようなら会が同学年で企画されました。

五泉市 黒井 伊作 (旧中26)

◎この度、東京同窓会々報第27号をご送与いただき、ご好意趣旨を拝受して、歴史をふまえた松中スピリットを集積した編集、温故知新、禹公移山、東京同窓会々長の巻頭につづき、現校長等の適切な文言など一読しただけですが、長く教育・研究界で微力をつくしてきて、リタイヤ、病氣、いま奇跡の「輪廻転生」をみた私に大きな力を与え懐古の情にひたるものがあります。

東京支部から“東京同窓会”へと発展的に会名を改められた点も意義深いと思われまます。例えば、母校主催の行事など、なかなか出にくいものですが、このように首都圏で大きく話す会であれば、広義には関東圏に住む人でも時には参加できる希望ももてます。

この会報では、福原平八郎君(異色の人と思っていたが)にも誌上で出会うことが出来、その他、名前だけで松中時代に戻れるのが同窓会誌や名簿であると思ひます。

尚、ご厚情に失礼ながら、少額同封いたしました。取り敢えず御礼まで。

掲載のほか、次の方々からもお便りを頂いております。

古俣 泰雄、窪田 寿雄、和泉庫四郎、近藤 晴彦、
佐藤 栄策、林 駿三、梁取 俊武、田沢 泰、
大原 良雄 (以上、敬称略)

旧中26回卒・同級会

◎5月18日(火)新発田から迎えに来てくれた近藤君と新潟駅前バスセンターで落ち合い、村松行きのバスに乗り磐越自動車道を快走し安田インターで下車、そこからは成沢君のマイカーで(集合場所の林昌寺)まで連れて行ってもらった。親切的な歓待ぶりに心温まるものがあった。今回は新津・新発田・安田地区在住の4名が幹事として念入りの企画をたて、開催され、藤田・大原両君にも改めて感謝の念を捧げたい。

林昌寺では(寿司弁当の昼食)が用意されており、ネタの良さには舌をならし、藤田夫人とご家族の方々が、手作りの味噌汁でもてなしてくれた親切は忘れえぬものになっている。

集い合えたのは16人と些か少なめであったが、近江八幡市から伊藤政雄君が駆けつけてくれ、昭和16年の卒業以来じつに57年ぶりに再会できた感動と喜びはいまだに興奮醒めやらぬものがある。

食事のあと藤田君の案内で、お寺の拝観と広い寺域に群生している多くの山野草を見て回ったが、詳しい説明を聞いただけに興味深いものがあった。最近では、話題になっているのか遠近を問わず多くの見学者が訪れるようになったそうです。本日の宿泊先になっている“月岡温泉・ホテル摩周”から迎えのバスが到着していたが、そのバスに乗って安田の名所旧跡を観光することになった。吉田東吾記念博物館では、ビデオを見ながら偉大な郷土の学者を偲ぶ時を過ごし、孝順寺・安田城跡・安田民族資料館・あじさい牧場等々、いずれも藤田君の詳細な解説とユーモアを交えての「ガイド」には、興味深々すっかり聞きほれるばかりであった。

午後6時半からの懇親会を前にして、恒例の記念写真撮影……。ご覧の通り謹厳実直の顔を並べていたが、乾杯直後から雰囲気急変したように和らぎ、再会して語りあえる喜びと幸せが会場一杯に広がっていった。年を忘れての宴会は、それぞれの部屋まで持ち込まれ深夜まで続いたようであった。



翌日は、水原代官所・瓢湖・安田ヨーグルト工場などの観光を予定していたが、体調を崩した自分には不本意ながら早めにグループと別れ帰宅してしまった。心配させたり迷惑をかけて申し訳ないと思っている。数日後、工場からヨーグルトが直送されて来て、幹事の気配りに嬉しさを、また味の良さには驚きを感じた。それ以来、近くのデパートやスーパーに立ち寄った時には、幾らか高めではあるが買い求めるようになってしまった。このヨーグルトをご存じ無い方には是非お勧めしたい思いである。来年は、村松在住者が幹事を引き受けてくれる事になったが『お互いの無病息災』を祈りながら、一人でも多くの級友との出会いを楽しみに、毎日を過ごしたいと思っている。

武藤 三郎(東京同窓会常任幹事)

「クラス会半世紀ぶりの友もいて

その変容にしばし戸惑う」

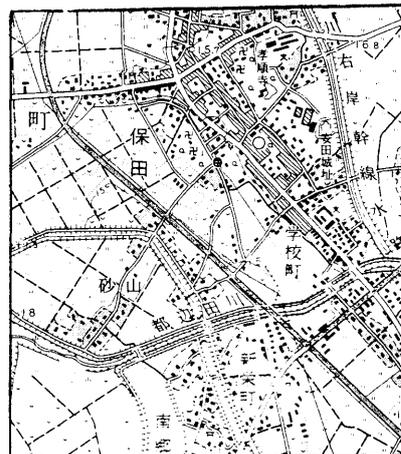
まさに名句です。半世紀ぶりにお会いした、武藤さんが全く変わっておられないのに驚きました。一層のご健勝ご多幸を祈念いたします。機会を得て是非一度、湖国をお訪ね下さい。

…追伸…

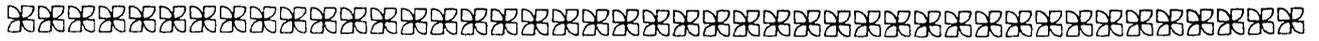
◎メダカの里、村松町三ノ宮・松ノ屋でメダカを養殖しておられ、私の甥(新津市在住、松高卒で最終は新津第一小学校長で退職)が「昔懐かしいウルメの佃煮です。召し上がって下さい」と贈ってくれたのですが、戦後の豊かな食生活に馴らされたせい、或いは養殖ウルメのせい、昔食べたウルメの味からは程遠いものでした。

◎“忠犬タマ公の碑”の記事は、在郷当時、川内村の話ですが全く知られていませんでした。確か今年の春か、昨年の後半期に関西テレビ「驚きももの木」放映で知りました。新潟駅の一角にその銅像が設置されるとのことでしたので、機会があれば一度見てみたいと思っています。

伊藤 政雄(旧中26・近江八幡市在住)



国土地理院発行50,000分の1地形図「新津」



旧中二十七回卒 同級会

平成11年度の旧中第二十七回卒(昭和17年)の、同級会が10月28日、東京在住者が当番で上州は月夜野町「上牧温泉・辰己館」(たつみかん)で開催されり。

卒業時は86名の仲間が居たが、戦死、病没、住所生死不明等にて現在確認し得る者僅か35名。それも病氣療養中あるいは足腰の痛い等のほか、わけありの理由で欠席者多く今回は一応元気なる者16名が出席せり。例年は大旨において20名余位なりしが今回はちと少なめなり。卒業以来60年近くほゞ毎年継続してきたりしたが、喜寿も近くともなれば、これ又やむを得ぬことと考へざるを得ず。今年も波田野(小野里)が逝く。昨年は北見。集合時刻午後2時半丁度、新幹線は上毛高原駅に着く。早速、旅館出迎いのバスに乗り込み、湯浴びもそこそこに恒例の基会所が始まれり。

懇親の場は板敷きの大広間にて勿論貸切りなり。囲炉裏を囲み「献残焼」なる料理を食す。高貴な人に献上した残り物、所謂お裾分けとの意なり。昔、上牧では上杉と武田の豪族の争い長き間続き、武士たちが夕焼けの空を背に、山菜や川魚を剣に刺し焚き火にかざして焼いたことより、剣先焼が「けんざん焼」になりたりと云われている由、説明にあり。竹筒にて燗をせし酒、串で焼いた肉、魚、山菜等実に美味なり。

在学時代、音楽で平均点以上得たこと無き連中の、下手なカラオケを上手に聞き、終われば拍手、拍手…。これ義理か本音か、早く終りたるを喜びてか本心は知ら

ず。芸者無用としたれば、仲居相手にダンスに興じ、近況を語り、持病を自慢し、夜は更に更ける。

翌日も快晴、ロープウェイにて天神平に赴き谷川岳を望む。秋色見事なり、心、大いに広がるを覚ゆ。下界に下り、汽車待ちの間また飲む。常とは申せ、よく飲み助、揃いたり。この度また愉快なり。代表を勤めし吉田をはじめ、西山、相田、落合の各幹事に深謝。

翌年の当番は津川となるも、津川は村山一人にて且つ療養中、手薄なるため急速、佐伯が代表を勤めることと相成り、会場は一挙に鹿瀬町「きりん山温泉」と定む。時期は未定なり。同輩健在なれと祈る。

(文中敬称略・佐伯)



囲炉裏を囲んで遠い昔を語り合う

旧中二十五回卒 同級会

昭和15年旧中第25回卒業の同級会が10月17日村松在住の松尾吉信君の肝入りで、福島県裏磐梯高原、五色沼の畔り「川上温泉・ホテル寿」で開かれた。

出席者9名は、磐越西線・猪苗代駅に集合、出迎いのバスに乗り込み車窓より深秋の磐梯山の紅葉を賞でながら宿に到着。久方ぶりの会合とあって、懇親の席はカラオケ、コンパニオンなし。ひたすら往時の思い出、旧軍隊話、近況の披露等に花が咲き、又当時の母校と現在の母校の状況を比べ「悲憤慨嘆」するなど夜遅くまで話は尽きなかった。翌日は近辺を回遊観光し、次回も元気な再会を約して解散となった。

今回の出席者は吉田正平(東京)松田 弘(埼玉)樋口修一(新潟)今井国弥(新潟)柳川 武(新潟)玉木秀夫(新潟)捧 金吉(五泉)村川真平(村松)松尾吉信(村松)の諸氏ら9名であった。

次回からは、もっと多くの出席を望んでいる。



晩秋の会津・磐梯山…1819m



高4有志ゴルフ・懇親会

◎高校4回卒同期会は1998年より「西暦の偶数年開催」となり、99年はお休みの年です。「寂しいなあ…親睦のゴルフ会をやりましょう、一泊懇親会付で」との某氏の発議が次のような企画となり「一泊二日懇親の宴会付、2ラウンドプレー」が実現しました。

1. 9月6日(月)

①長岡カントリークラブ 3組12名プレー

②蓬平温泉「よもやま館」 12名の懇親会

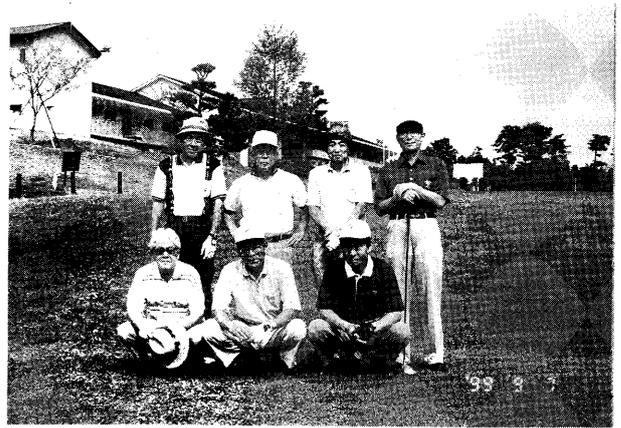
2. 9月7日(火)

①小千谷カントリークラブ 2組7名プレー

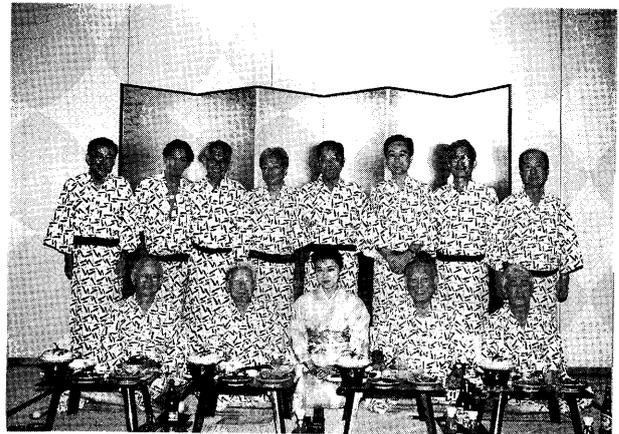
◎ゴルフのスコアには触れません。同期同好の士が一堂に会してクラブを振り、美人の女将のお酌で美酒を酌み交わし、旧交を温め懇親を深める幸せを味わいました。

参加できた各自の健康に感謝し、次回への期待をお互いに抱いて散会しました。

設営して下さいました地元の幹事さん、ありがとうございました。
鈴木 健司(高4回)



小千谷カントリークラブにて



美人女将といっしょに

クラス会 (高10回・三年五組)

◎第10回生(昭33年卒)三年五組は、ここ10年たびたびクラス会を開いています。平成11年も7月17日、還暦を祝って岩室温泉に集まりました。私たちのクラスのユニークなところは、担任の権瓶先生を、いつもお迎えしていることでしょうか。先生も74才、さすがに往年の毒舌は影をひそめましたが、口べたで、皮肉屋で、純情なところはひとつも変わっていません。変わらない先生を囲んでいると、世の中にいいかげん採まれた60才の私たちにも18才の高校生の純情が蘇ってきます。クラスメートの近藤さんが言いました「これって、黒沢明監督の“まあだだよ”の世界だね」
山下由起子(高10)



新潟県立村松高等学校 第10回卒業3年5組同級会 平成11年7月17日 於 岩室温泉 ゆもとや



ちょっといい話

◎8月15日の村松での総会后、二次会の木むらへと会場が移った。その道行の間、同窓会副会長の、渡辺照男さん(旧中31回卒)が私の重いカバンを持って下さった。途中何度も拝辞したのであるが「いいから、いいから」と言いながら私がかちっとでも歩みが遅れると立ち止まっては待っていてくれた。恐縮しながらも私はそれに甘えた。

お互いに古希を過ぎた男どもの、ただそれだけの事であったが、私は彼の親切と心遣いが、とても嬉しかった。また先輩、後輩の機微を感じることが出来た。そしてこの事をぜひ書き残しておきたいと思った。
(伯)



ご苦労様でした！蒲原鉄道 殿

佐伯 益一（昭和12年～17年、旧中27回卒）

平成11年（1999）10月3日をもって蒲原鉄道が廃線となった。蒲原鉄道に纏わる思い出は松高関係者にとって数々あると思うが、いずれ誰方かがお書きになると思うので、此处では私を中心とした思い出のあれこれを紹介してみたいと思う。

私は旧中時代5年間、津川方面からの汽車通学であったので蒲原鉄道には同じ期間お世話になった。

朝、津川方面、新津方面から上り下りの列車が同時刻に五泉駅に到着すると、我先にと電車に駆け込む。車内は五泉からの通学生で座席は殆んど埋まっている。当時は学校のお達しで中学生は車内の前部、女学生（旧村松高女）は後部にと位置づけられていたが女学生は座っていない。上級生が入って来ると下級生が一斉に立上がり直立不動で挙手の敬礼をし席を譲る。四、五年生となると旧軍隊の将官の態よろしく、指を内側に曲げた鷹揚な答札を返すが、中には軽く顎を下げて頷くような返札をする者も居る。私はその一人であったかも知れぬ。欠礼をすると後で必ず説教を食らう。

大きな感激はスキ一部練習で冬鳥越へ行った時の事である。村松駅を発車した電車はほぼ満員状態であったが、車中で誰かが「愛国行進曲」を口ずさみ始めた。すると一人が和し二人が歌い、やがて車内全員の大合唱の輪となり冬鳥越に降りるまで何度も何度もその大合唱は続き身震いするような感激を覚えた。今でもその時の光景は忘れられぬ。

戦争で男子の大方は軍隊に取られ、やがて蒲原鉄道にも女性の改札係や車掌が登場してくるようになる。上級生の中にその車掌に惚れ込んで何度も五泉・村松間を往復した者が居たと聞いたことがある。いま都内の地下鉄や京王線でたまたま女性の車掌や案内係を見かけることがあるが、往時は人手不足、今は男女平等の仕事としての違いはあっても昔の光景が今の状況と重なって唖に浮ぶのは敢えて私一人ではなからう。

冬の猛吹雪の積雪のため時々電車が不通になる。我々汽車通学生は村松・五泉間約一里の道の雪をこぎながら歩かねばならぬ。途中、鉄道の作業員が線路の除雪作業をしていた。「やあー大変だなあー」と声をかけた。すると「お前ら電車の有り難みが分かったか」と返事が返って来た。トタンに頭にきて「何を言うかバカ野郎ちゃんとゼニを払っているんだぞ」と言いながらマントの下の黒帯の柔道着をチラッと見せたら、それっきり黙ってしまった。ともかく当時の降雪は物凄く、仕事する人も歩く人も大変であった。あとで、悪い事を言ったなと思っていた。はるか六十年前の事である。

後年、私は鉄道官吏となったので思いは一入である。

それから、もうひとつ。新学年になると通学のため、大体一ケ年分の定期券を購入するが、何年生の時か忘れてたが蒲原鉄道の定期券を半年分しか買わなかった。当時の国鉄は約34～5円、電車は40円位で私鉄のせいか国鉄に比べ割高であった。10分くらいしか乗らないのである。そして半分の20円程は、下級生への奢りや級友達との飲み食いに使ってしまった。なにしろ私達の入学時の月謝は4円50銭、後で5円になったがその頃の20円といえば大金であった。使い切るまで大分日数がかかったようである。九月の新学期になると将に困ってしまった。やむなく父親に「実は電車の定期券を落としてしまったので…」と訴えた。「う～ん、それで汽車の方は？」と聞かれたので「それはパス入れの中へ一緒に入れておいた」「おかしいな、どうして電車の分だけ無くなったんだ」瞬間、あっ！、しまったと思ったがあとの祭り、どう言い逃れたか分からない。結局は散々怒られながらもお金は出して貰えた。教訓その一、嘘は必ずバレるものである。

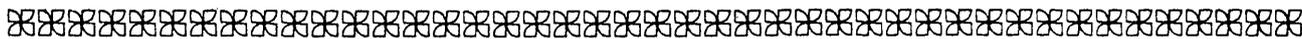
蒲原鉄道については、まだまだ多く書くことがあるが前述の通り、他の人も書かれるだろうから、この程度にとどめる。ただ最近（もう古くなったか）新聞やテレビ等の報道に廃線の記事が頻繁に出るようになった。無くなる頃になると世間は騒ぎ出す。現存最古の貨物車だの機関車だのと、その保存や記念式とかについて兎角騒ぎ立てる。電車はどこかの中古車両を購入したと聞くが、それは終始変わらず古びたものであった。逆に郷愁を感じさせる。新型車を導入したいと考えたとしても経済的にそれを許さなかった事情もあったかも知れぬ。地元の人達も蒲原鉄道の人達も一生懸命やった筈である。蒲鉄の歴史をひもとけば、それは良く分かる。

卒業後も本部同窓会に出席するため、何回となく乗せせもらった。床に染みたあの油の匂いが懐かしい。

蒲原鉄道……、ほんとうに良い名前であった。

参考までに蒲原鉄道の沿革を簡単に紹介しておく。

大正12年	3月18日	五泉・村松間工事起工
	12年10月20日	五泉・村松間営業開始
昭和	4年10月10日	村松・加茂間工事起工
	5年7月22日	村松・東加茂間営業開始
	5年10月20日	東加茂・加茂間営業開始
	60年3月31日	村松・加茂間17.7㎞廃線
平成11年	10月3日	五泉・村松間4.2㎞廃線



蒲原鉄道の廃止に憶う

東京同窓会副会長・伊藤 勇五 (旧中33)

新しい世紀も間近な昨年の秋、蒲原鉄道が廃止になった。予てから云われていたが、いざそうなったと聞くとやはり淋しい。村松は小さな町ながら、旧制の中学校、高等女学校があって文教の町として親しまれ、また旧陸軍の歩兵第三十連隊が置かれ、軍隊の町として活気があった。しかし磐越西線も信越本線も村松を通過しなかったため、陸の孤島のように取り残され交通の便が悪かった。この為、鉄道の敷設を望む地元の人達の思いは切実なものであったと云う。そんな中で大正11年、蒲原鉄道(株)が設立された。そして大正12年に五泉・村松間が開通し、次いで昭和5年、村松・加茂間が開通となった。かつて磐越西線や信越本線から敬遠された村松が五泉・加茂間を結ぶ、全長21.9キロの鉄道によって両線と繋がったのである。以来、蒲鉄と云って親しまれ地域の足として大きな役割を果たして来た。しかし急速な道路網の整備、車の普及によって交通手段の多様化が進む中で、利用客の減少が続き、遂にこの度の結果となった。「開設このかた、地元の鉄道として只管に駆け続けた77年であったが、たとえ鉄路ば消えても地域に印した栄光の軌跡はいつ迄も人々の胸に残る事と思う」。

私が蒲鉄に乗るようになったのは、旧制村松中学校に入学し鹿瀬から通ったためである。昭和16年だった。

当時は、亀田・新津・五泉から、また津川方面や加茂方面から大勢の生徒が村松中学校に通った。東蒲・中蒲で唯一の中学校だったからである。これらの生徒はみな否応なしに蒲鉄を利用したので、毎朝満員電車から降りる生徒達でホームから駅前通りまで一杯になったものだった。現在この方面から村松高校へ通う生徒は僅かな数だと云うから、昔日の景、偲ぶべくもない近年の村松駅だったろうと思う。蒲鉄が廃止になる前に、もう一度乗っておきたいと思っていたが、昨年の8月末それを果すことが出来た。その日、五泉で降りて跨線橋を渡り蒲鉄のホームを見やるとポツンと一輛淋しそうに電車が停っていた。乗客は私を含めて僅か6名、それなのにジイット待っていた電車が何か不憫に思えて胸がジーンとなった。車窓から見える、白山も菅名岳も堂々として、あの頃と変わりなく大蒲原、橋田などの里山の山並みも、黄金に色づいた蒲原の沃野も昔のまゝだった。

しかし、あの当時、砂利道で建物なんか全然なかった線路沿いの村松五泉街道は、店舗・事務所・倉庫・娯楽施設などいろいろな建物が立ち並び、整備された街道を多種・多様な車が、私の乗っている電車を追い抜いて行く。「時代なんだよなあ蒲鉄！」と心の中で呟いて、もう一度ガラガラの車内を見渡し大息をついた。電車が村松駅に着いた時、昨年、会長と一緒に表敬訪問した松高のことが頭に浮かんだ。若し時間があつたらコッソリ校門の前を通過して見ようと考えていた。

蒲鉄の思い出 (1)

ささやかな抵抗

木村 孝子 (高8)

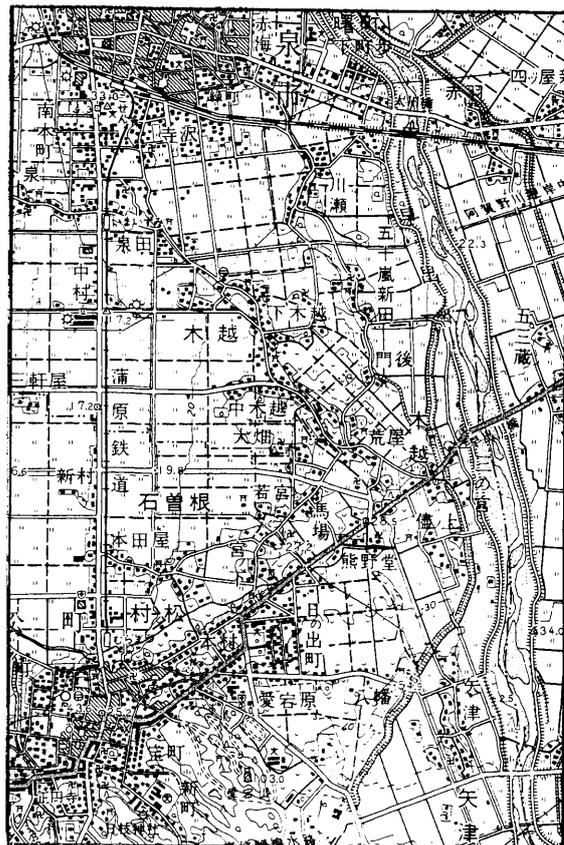
◎確か、蒲原鉄道の運賃値上げの話が出たとき、私たちは電車通学を一時ストップするという抵抗を試みました。急速、自転車の猛特訓。Sサイズだった私がLサイズの自転車と悪戦苦闘して一週間ほどガンバリました。季節が何時だったか、何年生の時だったか全く覚えておりませんが、電車通学の懐かしい思い出のひとつです。

私の中の蒲原鉄道

山西 愈佐子 (高8)

◎昭和28年から三年間、青春の戸惑い、不安、将来への希望を乗せて蒲原鉄道は走っていた。

五泉駅で小さな坂を登りホームへ。二両連結の電車に乗るとカーブを描きながら間もなく今泉停留所へ。ここで同窓生二・三人を乗せ、真っ直ぐに大正の面影を残す村松駅へ。電車の窓から外へ目を移すと、緑の田んぼの中の村松新道を家庭コースのMさん達が松高へと自転車を漕ぐ。白いブラウスに紺のスカートが、まばゆい光の中で泳ぐ。一幅の絵のごとく私の脳裏に浮かぶシーンである。後年、何度か村松を訪れたが蒲原鉄道を利用する機会を持てなかった。残念である。



国土地理院発行 50,000分1地形図「新津」



訃報

関 孝世氏 (高3回)

東京同窓会常任幹事・関 孝世さんが病氣療養中のところ、6月11日午後4時30分亡くなりました。

6月13日お通夜、14日告別式が、川崎市多摩区南生田「春秋苑」に於いて執り行なわれ、東京同窓会より佐伯会長はじめ大勢の方々が参列いたしました。関さんは学校教育に一生を捧げられ、また激務の傍ら長年にわたり同窓会東京支部の幹事を努められ同窓会の発展にご尽力されました。

ここに謹んで哀悼の意を表し

ご冥福をお祈りいたします。 享年66歳 合 掌



元禄の豹・堀部安兵衛を読んで

佐伯 益一 (中27)

高校第5回(昭和28年)卒の雲村俊愷さんの「小説仙寿院裕子」に続く第二の大作「元禄の豹堀部安兵衛」の著書をご本人から恵贈いただいた。

私は元来、忠臣蔵の裏話に非常に関心を持っていたので、寸暇を惜しんで楽しく読ませていただいた。

読む程に意外な事実が分かってきた。新発田藩と村松藩との関わり、二十八才で堀部家に婿入り、赤穂藩に仕官してから僅か三年ばかりの間に枢要な地位に就いていること。特に驚きであったのは安兵衛が下戸であったことなどである。もちろん小説であるから虚説もあり創作もあるだろうが、ともかく面白かった。よく調べられたものと敬服している。詳しい紹介は省くが、会員初め一般の方にも是非、ご一読をお奨めしたい。(1,800円)



表紙について

「七福神の図」

真言宗・山口千手観音の境内にある“七福の堂”に保存されている 享和年間(1801~1803) 鶴寿 作と記してあり、七福画としては最古に属するものである

山口千手観音は奈良時代の僧・行基(668-749)が千手観音を祭り、平安時代に空海(弘法大師 774-835)が訪れ堂を建てた名刹

(所在地) 埼玉県所沢市上山口

西武線・西武球場前駅より徒歩6~7分

蒲鉄電車線 最後のイベント

蒲原鉄道(本社・村松町、茂野新一社長)は、9月26日、設立77周年記念「蒲鉄レール祭り」を村松駅ホームで開催した。10月3日にラストランを終えた電車線(村松―五泉間、四・二キロ)の最後のイベントとなった。

蒲原鉄道は9月22日に会社設立77周年を迎えた感謝の気持ちと、利用客に電車線の歴史を振り返ってもらった。当日は午前9時半から村松駅ホームで記念式典を行った。1930年製の古典電気機関車「ED1」の牽引する「77周年記念列車」が9時45分に出発し、五泉間を1往復した。五泉駅ではJR磐越西線に復活した「SLばんえつ物語号」との「顔合わせ」もした。

このほか、村松駅構内では往年の貨物列車の展示や撮影会が行われた。(毎日新聞新潟版より)

